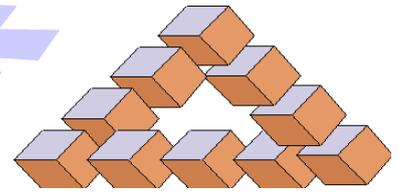


会長の独り言



No.3 H30.6.6

横浜市小学校算数教育研究会長 小林 広昭

研究主題 「数学的に考える資質・能力を育成する算数科学習」
～数学的な見方・考え方が成長する学び～

主体的・対話的で深い学びについて考える！その1

小学校学習指導要領(平成 29 年告示) 解説 算数編の 322 頁に主体的な学びについての次の記述がある。

算数科では、児童自らが、問題の解決に向けて見通しをもち、粘り強く取り組み、問題解決の過程を振り返り、よりよく解決したり、新たな問いを見いだしたりするなどの「主体的な学び」を実現することが求められる。

この文の主語がとても大切と考えます。「**児童自らが**」ということをもっと意識して実践していくことが求められています。

これまでの算数科の授業では、先生が問題を提示し、(なぜだかわからないけど見通しを立てたり見積もりをしたりする。)そして、脈絡もわからないまま本時の課題を先生が提示し、問題を解決する。その後、それぞれの解決方法について、目的のわからない話し合いをして、最後は先生がまとめて終わる。子どもの主体性というより、教師の指示、発問によって、子どもにとっては極めて受動的な授業が展開されてきました。(今もそんな授業がたくさんありますが。)

ところが、**児童自らが**「見通しをもち」「粘り強く取り組み」「問題解決過程を振り返り」「よりよく解決したり」「新たな問いを見いだしたり」しなければなりません。先生に言われてするのはなく、子ども自身が自らの意思で活動するのです。そのような学習をデザインしなければならないのです。

5月の幹事研修会でお話しした、子ども自身が「〇〇したい」を引き出す学習に転換できなければ、とても「主体的」とは言えないものになります。さらに、子どもたちにとって、問題解決過程を振り返るための必要感や必然性がなければ、そのようなことをしようと考えません。振り返る視点や振り返る方法、振り返るよさを感じ得るようなことがなければ、次にやろうともしません。よりよく解決したり新たな問いを見いだしたりするのも、その目的や必要感がなければ、行われません。つまり、これからの学習は、学習者が活動するための目的や必要感、必然性を伴わなければならないのです。

今月の各学年部会の実践は、授業づくり講座の内容は、**児童自ら**になっているのでしょうか。資質・能力の分析をしてもそれを教え込むような展開では、子どもは学び取ることはできません。子どもの主体的な学びをめざした実践になっているのか、そのような学習に変えていくためには、どこをどう改善しければいいのか、先生方も司会にさせられるのではなく、主体的に関わり、学んでいけるよう検討していただければと考えます。

<この「会長の独り言」は、印刷して配付していただいてもかまいません。>